

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：23501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720086

研究課題名（和文） 明治期における翻訳文化と幻想文学の相関に関する研究

研究課題名（英文） A Study of the Correlation with Translation Culture and Literature of Fantasy in the Meiji Period

研究代表者

野口 哲也（NOGUCHI TETSUYA）

都留文科大学・文学部・准教授

研究者番号：90533000

研究成果の概要（和文）：

従来の文学史観では周縁領域に位置づけられていた明治期の翻訳文学テキストを取りあげ、幻想文学というジャンルとの方法的接点を探りつつ歴史的・理論的な考察を加えた。

日本近代の文化的制度の成立過程に決定的な形で関与した翻訳が幻想文学にどう作用したのか、また逆に幻想文学の表現機構が日本近代の言語観や精神構造にいかなる形で関与したのかという実態について、井上勤や森田思軒、泉鏡花らのテキストにおける言語的な移動・変容・越境の様相に即して明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I took up a translation literature of the Meiji period placed in the fringe domain by the view in the conventional literary history and added historical and theoretical consideration while investigating a point of contact methodological with the genre of fantastic literature.

I clarified how translation that involved in the establishment process of the cultural system of modern Japan in decisive form influenced literature of fantasy, I also examined how expression mechanism of literature of fantasy has been related to the linguistic view and the mental structure of Japanese modernization, which was based on the aspect of linguistic movement, transformation, and border-crossing in the text of Inoue Tsutomu, Morita Shiken, Izumi Kyōka and others.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：明治文学、翻訳、幻想文学、トランスレーション・スタディーズ、井上勤、森田思軒、泉鏡花

1. 研究開始当初の背景

明治期の翻訳に関する研究の背景として、比較文化・比較文学の領域では、日本近代文学の初発期における欧米文学の受容の様相を実証してきた。また、翻訳語に関する言語学的・国語学的アプローチは、当時の流動的な言語状況の実態を明らかにしつつある。これらの研究は既存の近代文学史観を再検討する余地があることを示唆している。ただし、そこでの方法論には西欧の文学・文化・言語の受動的な移入による啓発という一方向的な影響論に回収されやすく、日本の近代思想や制度の形成の屈折したありようを単純化し、また西欧のそれに対する反作用的な関与といった側面を見落とししてしまうという問題点があった。また、翻訳そのものの定義を狭く閉じることで方法的な厳密さを得る一方で、対象の領域を限定してしまうという問題もある。それは特に直訳（起点言語思考の翻訳）の系譜に優位性が置かれてき明治の翻訳文学史には顕著で、意識（目的言語志向の翻訳）や「翻案」のような文学的価値論と不可分のジャンルを扱うことができないという問題もある。

一般に狭義の翻訳は言語的な異文化間コミュニケーションとして捉えられるが、原文テキストと訳文テキストの関係は決して一方的／固定的なものではない。近年のトランスレーション・スタディーズの理論は、原文／訳文という単純な図式や「意味の再現」という発想そのものを見直が見直されつつある。その動向は宗主国／植民地のような文化館の優劣を乗り越えようとするポストコロニアル批評のような関心とも軌を一にしている。また、政治・経済におけるグローバルな潮流の中での各国の流動的な言語状況を反映したものとして、現代文学・文化とその研究においても、翻訳という営為そのものの創造性が本格的に問われ始めているのである。これに対し、明治期を対象にした文学研究・文化研究にあってはそのような動向が未だ顕著でない。しかし、翻訳の意義が越境的な言語行為の過程そのものに認められるならば、こと現代のような明示的な多元文化のシステムに限らず、明治期の、それも周縁領域に排除された反近代的文化事象（旧時代のサブカルチャー）を考察の対象とすることは、却って今日的な意義を持つはずである。なぜなら、近代的な意味での文化を確立した明治期にあって、反近代的事象がどのような影響を受け、また逆にそこにどう関与していたのかを検討することは、われわれの志向の枠組みや生活環境の基盤そのものを問いなおすことでもあるからだ。

報告者は泉鏡花（1873-1939）を中心とした幻想文学の作品研究に取り組んできたが、それを通して、文学史における周縁領域に対

する歴史的な考察の必要性和意義が次第に明らかになってきたことで、上記の着想に至った。後発に方法的な影響を与えるという形では文学史の系譜に強く関与せず、また欧米言事も全く無縁であるかのようにイメージされるテキストが、実は翻訳を介して異文化を横断し、既存の制度を相対化する幻想の方法を確立していることを踏まえ、翻訳と幻想文学の連関や、両者に認められる想像力の構造の共通性を考察することによって、比較文学、文化研究としても有効な射程を広げることができると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、従来の文学史観では周縁領域に位置づけられてきた明治期の幻想文学テキストを分析の対象とし、特に翻訳との関わりにおいて歴史的・理論的な考察を加えることによって、近代の文化的制度の成立事情について再検討を行うための有効な視座を開くことを目的とした。つまり、翻訳文学そのものの論ずるだけでなく、それと並行して、あるいはそれと関連する形で、幻想文学および文学における幻想性を対象として、翻訳という観点からテキスト分析を位置づけるところに本研究の意義がある。日本の近代文学の成立過程には特に翻訳が決定的な形で関与しているが、この観点から近代文学の枠組みを洗い直したうえで、それが幻想文学というジャンルにどのように作用したか、また逆に幻想文学の表現機構が日本近代の言語観や精神構造にいかなる形で関与していたのかを明らかにすることを試みた。

本研究の長期的課題としては、翻訳の理論と幻想の理論を言語的な移動・変容・越境として結びつけ、当該分野において新たな文化論的視野を開示することを目論んでいる。政治的緊張とは無縁にも見える幻想的領域を対象とし、翻訳の観点から考察を加えることについて、明治期幻想文学を対象とした場合にはその方法の有効性は未知数であるが、幻想と翻訳の構造的・機能的な類縁性を実証的に裏付け、体系的に理論化することが可能になれば、近代の言語（国語）形成に関する新たな知見を提示することにつながるはずである。本研究およびその後の継続課題によって、「翻訳」と「幻想」の連関や、両者に認められる想像力の構造の共通性を考察することによって、比較文学・文化研究として有効な射程を広げ得ると考えている。

3. 研究の方法

上記の目的に添って、本研究では主として以下の課題を設定した。

(1) 研究の理論的基盤としての、幻想と翻訳に関する方法論的整備

従来の翻訳研究および近年のトランスレーション・スタディーズの動向を視野に入れながら、研究全体の基盤的枠組みとして幻想文学と翻訳に関する理論的考察を進める。

(2) 研究対象の収集・整備とテキストの分析・検討

幻想文学と翻訳の方法的連関を示しうる文学テキストについて資料的な整備を行い、作品論的観点から分析・考察を加える。特に、井上勤や森田思軒といった、明治初期の翻訳家の訳文の特色と、後代のテキストがそこからどのような影響を受けているかを具体的に検討する。

(3) 明治期における翻訳と幻想の歴史的意義に関する記述

明治期の新聞雑誌媒体を中心に批評的言説を取り上げ、日本近代における文学観・言語観の形成に対して翻訳がどう関与していたのか再検討する。具体的には坪内逍遙や森鷗外、内田魯庵や田岡嶺雲などの批評と(2)で取り上げる翻訳テキストの関係の考察。また、それら方法の今日的意義についても検討を加える。

4. 研究成果

本研究の基盤的作業として、柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』(春秋社、1961)から川戸道昭・榊原貴教編『明治翻訳文学全集』(大空社、《新聞雑誌編》全52巻、1996-2001、《翻訳家編》全20巻、2002-2003)まで、明治期翻訳文学の書誌に関する文献を再検討しながら、翻訳と幻想的方法的連関を考究するうえで対象とすべき資料を収集・整備した。そのうえで明治期の翻訳テキストが幻想文学の方法として受容・洗練されてゆく様相について個別の事象に即して分析・考察を加えた。とりわけ従来の文学史記述では周縁に埋もれていた翻訳(翻案)テキストを対象化し、文化史的観点から新たに光を当てる目的から、井上勤(1850-1928)や森田思軒(1861-1897)のテキストを分析し、それらに大きな影響を受けた作家として泉鏡花(1873-1939)の幾つかのテキストの幻想性について論じた。

森田思軒の訳業は、明治20年代初頭、すなわち翻案やダイジェスト、あるいは豪傑訳などと言われた自由訳の時代にあって、原文の文法的構造にまで注意を払って原文の精髓を逐語的に移し取ろうとする「周密訳」を試みて近代の翻訳に一大転機をもたらしたと評されている。しかし思軒自身も同時代の未熟な翻訳と同様に様々な試行錯誤を重ね

て「周密文体」を形成しているようにその動態はさほど単純ではない。たとえば思軒は織田(丹羽)純一郎の『花柳春話』(明治11-12)や藤田鳴鶴・尾崎庸夫『繫思談』(明治18)や益田克徳の『夜と朝』(明治22)に触れ、それぞれの訳業の、その時々々の画期的意義に言及している。思軒の文体もそれら同時代の翻訳文との相関関係によって形成されているのである。また、これら3種のテキストの原作はすべて当時よく読まれていたブルワー・リットンであることも、当時の翻訳の実態をよく表している。

森田思軒以前の翻訳家として、ジュール・ベルヌのSF作品を多く手がけた井上勤もまた、リットンの翻訳に携わった一人である。井上の訳文は原作のストーリーに即しつつも細部においては相当の省略や脱線・誇張を含み、厳密な意味での翻訳以前の姿とも、あるいは逆に精緻な周密訳の先駆とも見做される場所である。しかし井上の訳業については、ヴェルヌのそれを除けば詳細に検討されることは少なかった。明治初期の翻訳家としての井上の意義もまた、抄訳・翻案に近い自由な形からほぼ逐語的といえる訳まで様々に試みていることであって、その流動的・あるいは過渡期的な翻訳の実態は井上自身としても最初期の訳業にあたる『龍動鬼談』(明治11)に既に認められる。井上の翻訳については今なお研究が乏しいため、本研究としても今後さらに具体的な対照作業を継続しながら、その多面的な様相に光を当ててゆく必要がある。

また、従来欠けていた通史的な展望を見据えたテキスト分析によって、近代文学の初発期にあたる明治初期における翻訳の位相に今日的意義を見出すために、多和田葉子(1960-)のテキストを取りあげて考察を加えた。多和田は日本語とドイツ語で並行的に執筆しながら「翻訳」による言語的・身体的変容を文学的モチーフとしているが、近年はエッセイや創作で、多言語社会についてより政治的に踏み込んだアプローチを見せつつ、翻訳や多言語との接触によってもたらされる創造性を様々に提示し続けている。これもまた、明治期以来の翻訳と幻想の相関関係の今日的なあり方として位置づけられもする。

以上の成果を下記の論文等に発表した。従来と比較文学的方法における影響論の成果から近年のトランスレーション・スタディーズの動向を踏まえたうえで、近代の初発期あるいは現代における翻訳のアクチュアルな意義を具体的なテキストに基づいて示す研究事例として位置づけられよう。

本研究は明治期の翻訳文学と幻想文学を中心的な対象としたが、そこに関与する翻訳的な想像力とは、必ずしも実体的な他言語に対するものにとどまるわけではない。世界各

国の現代作家は、狭義の翻訳行為の過程で起こる言語的変容を様々に描いているが、日本においてもそれは例外ではない。そのような言語越境的テキストをモデルとして幻想文学テキストにおける境界の生成や越境のありようを具体的に見つめてみることで、直接的に多言語に関与していないテキストも同様の文化的構造や歴史的展望の下に把握することができるだろう。それらのテキストの特質は幻想と翻訳を理論的に接続させた方法によってより有効な分析を加えることができる。他の方法では一括して捉え難い事象どうしを結びつけ、テキスト分析に対しても新たな視角を与え得る点に本研究の成果と可能性があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①野口哲也、「あなた」はどこへ行くのか—多和田葉子『容疑者の夜行列車』論—、国文学論考、査読無、第49号、2013、pp. 78-92

②野口哲也、『鏡花小品』論—脱ジャンルのテキストの様式—、鳴門教育大学研究紀要、査読無、第26巻、2011、pp. 243-257

[学会発表] (計2件)

①野口哲也、井上勤『龍動鬼談』とその周辺、日本比較文学会東京支部例会、2013年5月18日、東京大学

②野口哲也、近代文学(研究)と民俗学—明治～大正期の紙上怪談より—、鳴門教育大学国語教育学会、2010年8月24日、鳴門教育大学

[図書] (計1件)

①泉鏡花研究会(編)、和泉書院、論集泉鏡花 第五集、2011、pp.137-155 (野口哲也、唄声の重層性について—『草迷宮』論—、査読有)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野口哲也 (NOGUCHI TETSUYA)
都留文科大学・文学部・准教授
研究者番号：90533000

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：